

学力向上推進地域

連携中学校区：仁方中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
呉市立仁方小学校	13	285
呉市立仁方中学校	7	130

(R211.1現在記入)

1 指導上の課題

令和元年度標準学力調査において、正答率40%未満の児童の割合は、国語で5%、算数で6%であった。中学校第2学年の国語で7.1%、数学で35%と課題が残されている。

授業改善について、児童生徒アンケートで「理由をつけて発言する場」「ノート等指導」に関する項目の肯定的回答が低い結果となった。また、家庭学習における「自主学習ノート」について、学習の内容の充実と課題のある児童生徒が多く見られる。「めあて」と「ふりかえり」を記述させる取組が成果として表れていない現状である。

2 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

研究テーマは昨年度引き続き、「主体的に学び、思考力・表現力を身に付けた児童生徒の育成～課題設定と解決過程の工夫を通して～」である。「学習意欲」を高めるために、課題発見・解決学習の単元開発などにより課題設定と解決過程の工夫を行い、発問・教具・教材などの授業改善を行った。さらに、習得した「知識・技能」の活用場として、根拠をもとに理由を付けて発言させたり、自分の考えを明確にさせるためのノート指導、板書・ワークシートの工夫を行ったことにより思考力・表現力の育成を図り、学力を向上させることがねらいである。

(2) 取組について

【学力向上に向けての取組】

本中学校区では、教科指導と生徒指導を小学校・中学校で一貫した指導を行うために、「重点取組表」に基づき、「授業づくり部会」「環境づくり部会」に分かれ小中連携を行い、重点取組表の改善を加えながら研究を進めた。

各部会での主な取組が次のようである。

【授業づくり部会】

- ・ 研究授業・協議会
- ・ 小学校と中学校での学力補充
- 【環境づくり部会】
- ・ 小中連携した授業観測の徹底

【学習習慣の定着・家庭学習の充実】

学習習慣の定着のため、授業や学力補充などで、学力に課題のある児童生徒への支援を行った。また、家庭教育支援アドバイザーを活用して保護者連携を行い、学校と家庭で一貫した指導を行えるようにした。さらに、家庭学習の充実を図るため自主学習について指導したり、工夫している家庭学習ノートを掲示したりして、家庭学習に対する意欲の向上と学習内容の充実を図った。

【個に応じた指導の充実】

個に応じた指導の充実に向けて学級担任を中心に①個別の指導計画と②個人のファイルの作成を行い、職員会議の中で情報を共有した。中学校では③授業支援対応表を作成した。また、④家庭教育支援アドバイザーの活用と、⑤定期的な児童養護施設との連携も行った。

3 実践事例

【学力向上に向けての取組】※リーフレット参照

【教科指導】

- ・ 「授業の流れ」の提示

1時間の授業内容の「授業の流れ」の提示をすることで、生徒に見通しをもたせ学習に取り組ませた。また、授業後に1時間の授業内容と本時の生徒の成果と課題を振り返り現状を把握することで教師側授業改善にも活用した。

- ・ ノート・板書・ワークシートの指導

自分の考えを明確にするための工夫として、授業の流れを見返すことのできる①構造的な板書にしたり、②板書と同じワークシートを配付した。また、発表や発表を聞く視点をグラフで評価できるように簡素化することで、書くことに時間を必要とする生徒が、「聞くこと」に集中できる環境を整えた。

【生徒指導】

- ・ 異年齢交流の充実

児童生徒の自己有用感を高め、リーダーの育成するために異年齢交流活動や、縦割り活動を行った。令和3年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、これまでと同じような交流はできなかったが、2月に6年生がオープンスクールに訪れた際、中学生が小グループを作り、中学校を案内した。

【学習習慣の定着・家庭学習の充実】※リーフレット参照

【補充学習】

<小学校(スマイルタイム)>

火曜日・木曜日・金曜日に国語・算数を中心に学習内容の復習を行う。1～3年生は週2回4～6年生は週1回で行っている。少人数の児童に全職員が指導した。

<中学校>

水曜日に全生徒を国語・ベーシック・トライ・クエストのコースに振り分けることで、各コースの生徒の人数を減らし、個別に指導ができるようにした。

国語コースでは、音読を中心に、書いてある文字や言葉をリズムや音に注意し、はっきり読むことで内容理解へつなげられるよう練習をした。

クエストコースでは、様々な教科の発展的な課題を生徒自らが選択し、パソコンルームで調べたり、同じ課題を選んだ生徒同士で教え合いをしたりしながら、主体的に学習を進められるようにした。

【個に応じた指導の充実】

(1) 具体的な取組内容

① 対象児童生徒の「個別の指導計画」の作成、学習状況、家庭状況、効果のあった手立てや児童生徒変容などを教職員間で共有した。小学校では、一斉に時間をとり、振り返りシートを基に小グループで協議した後、「個別の指導計画」を記入する取組を行い、全教職員間で共有を図った。

② 「個人ファイル」の作成

対象児童生徒の「個人ファイル」を作成した。各教科でのプリントやノート、作品、日記などをファイリングしたものを、児童生徒の実態を把握し活用し、指導の充実に取り組んだ。また中学校では、生徒のよい変化が見られたプリントには、ファイリングの際に教科担任による分析を付け、次の授業や他教科へ反映できるようにした。

③ 「授業支援対応表」の作成(中学校)

中学校では、対象生徒を含め課題のある生徒への支援を目的として、特別支援教育コーディネーターが、時間割へ生徒指導員、学校教育支援補助員、家庭教育支援アドバイザーを割り振った計画表を作成し、学習支援を行った。授業者と支援者がどの生徒に対してどのような支援をするのかを事前で打ち合わせ、授業後には生徒の様子などについて担任等と連携し、支援の充実を図った。

④ 家庭教育支援アドバイザーの活用

小学校では、1・2学期末に、家庭教育支援アドバイザーによる保護者対象の「家庭教育相談会」を実施した。

⑤ 児童養護施設との連携

中学校では、定期的に児童養護施設との家庭学習や通学等に係る連携会や施設訪問を月1回行った。また、個別の学習指導も行った。

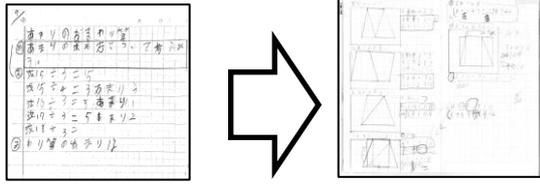
(2) 児童生徒の変容

【児童Aの変容(小学5年生)】

① みかたカードによる視覚的支援の成果

算数科において式・図・表の置き換えができるようになってきた。

また、友達の意見と自分の考えをノートに書き表し、自主学習に生かす姿が見られるようになってきた。

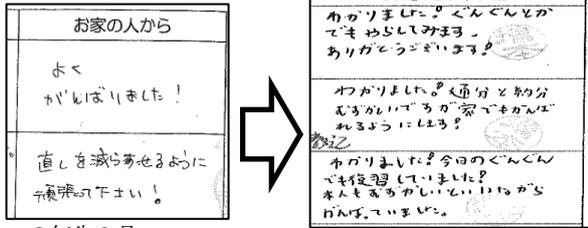


3年生9月

5年生9月

② 保護者の変容

家庭教育支援アドバイザーとの連携により、週1回のスマイルタイム（放課後補充）での保護者との手紙の内容も変容が見られた。「よくがんばったね、がんばってください。（3年生）等の返事から、「ぐんぐん《家庭での自主学習》でもやらせてみます。」と、より関心をもったり我が子に寄り添ったりする保護者の姿が見られるようになった。

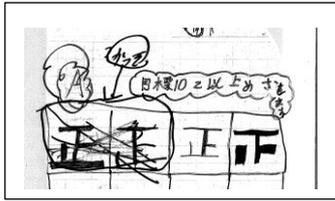


3年生9月

5年生9月

③ 自己有用感の向上

徐々に自信も見られ、家庭学習の自主ノートへ自分を奮立たせる言葉を書いたり、評価された時は正の字を書いたりする等意欲の向上が見られた。やり切ることで認められ、自信を付けることで自己肯定感が増したと考えられる。



自主ノートの表紙に評価を正の字で数える児童A



A評価10回で渡すカード

【生徒Bの変容（中学3年生）】

生徒Bは、児童養護施設の生徒である。年度当初「個別の指導計画」には、「登校時間がぎりぎりになることがあるが、生活にたくに変化はない」という記述が見られたが、生活面において、担任の継続的な声かけと約束により、時間に余裕をもって登校し学校生活を始められるようになった。また、家庭教育支援アドバイザーとも連携し、児童養護施設訪問の際に一貫した指導を行った。学習面において、「個別の指導計画」に「数学の学習に意欲的になり、生活記録表に学習に意欲的なようす。基礎的な科学力はありますが、英語に課題がある。」という記述があった。その記述をもとに、英語の音読用紙を作成し、施設内で活用していくことで家庭学習での英語を読む力の向上を図った。また英語科の授業内では、絵を見て、関連する内容や関連する自分のことについて1分間できるだけ多く話す活動を行い、話したことを書くという活動へとつなげる中で、間違いを恐れず話し、周りの生徒が使っている表現や、自分が以前使用した表現を活用して新しい内容に書き換えたりできるようになってきた。文法的なミスも減りつつあり、表現力が向上している。



文法的な間違いが多く、文の理解に支障がある。



文法的な間違いが少なく、過去に使用した英文を活用している。



文法的な間違いはなく、英単語のミスのみになっている。

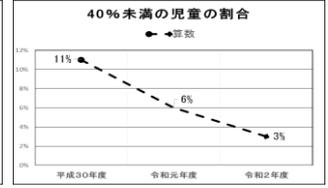
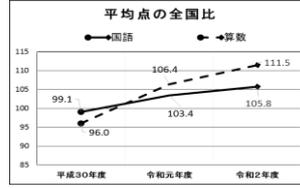
<該当生徒の定期試験中の表現力に関する問題の結果>

令和2年度試験	1学期 期末試験	2学期 中間試験	2学期 期末試験	学年末 試験
得点率	20%	40%	70%	80%
学年平均との差	-2.5	-1.4	+0.3	+1.6

4 研究の成果と課題等

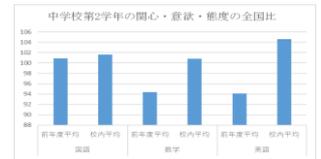
(1) 成果

3年間の小学校全校の変容（平成30年度・令和元年度・令和2年度）



小学校では、令和3年3学期に全校実施した標準学力調査において、全校平均が全国7位で国語、算数とも一昨年度、昨年度より上昇し、ほぼ全学年が全国平均を上回った。また、40%未満の児童の割合も、平成30年度、令和元年度と算数科において減らすことができた。

中学校では令和2年度の標準学力調査第2学年の正答率40%未満の生徒の割合は国語6.5%、数学15%となり減らすことができた。また、同調査の国語・数学・英語の関心・意欲・態度の観点において、全国比が前年度の全国比を上回っている。学年が上がるにつれ、学習内容も難しくなるが、生徒の興味・関心を高める課題設定や、解決過程の工夫を全教科で行い、定期的な校内研究授業や事前・事後の検討会を行うことで教員間での理解が深まり、他教科ともつながりのある学習活動を仕組むことができた。また、生徒の生活アンケートで、「1日の家庭学習時間が学年目標を達成しています。（1学年：90分2学年：100分、3学年：110分）」という項目では肯定的な回答をした生徒の割合が95.3%（令和元年度より+1.4）となり、家庭学習習慣が定着した。また、「補充学習は自分のためになっています。」という項目では、肯定的な回答をした生徒の割合が93.0%（令和元年度より+1.8）となり、自分に必要な学習ができていると感じている生徒が増え、学校活動全体を通して、学習に対する意欲が向上した。



(2) 課題

令和2年度標準学力調査において、全国平均と比べて、中学校国語は-1.3（令和元年度国語：+2）、中学校数学は+0.8（令和元年度数学：+0.8）であった。小学校においては、正答率40%未満の児童生徒の割合は、全校平均で国語科において7%、算数科において3%である。全国比をみても、高学年で国語科で9.5%と全国平均を下回っており学年があがるにつれて、個別の支援を必要とする児童が増え、課題が残されている。

また、中学校の標準学力調査の観点別の結果では、国語は、「話す・聞く」の項目において-6.2%、数学は「数学的な見方考え方」の項目において-0.3%と未だ表現力に関する観点に課題がある。

(3) 今後の改善方策等

今後も継続して「表現様式の置き換え指導」や「自分の考えを明確にする指導」を行うことで児童生徒の「思考力・表現力」を高めていく。また、小中学校で「ログトレ」を定期的・計画的に実施することで、児童生徒の学習の土台となる①記憶②言語理解③注意④知覚⑤推論・判断の5つの認知機能を高めていく。特に「話す・聞く」に関わる②言語理解④知覚へのアプローチを強化し、各教科の学習へとつなげ、学力の向上へとつなげていく。